

クールな高嶺の御曹司に、
想定外の身分差溺愛を刻み込まれています

プロローグ

休日の昼下がり――

部屋中にアロマの甘やかな香りが広がっている。

「そのワンピース、とてもよく似合ってる」

「本当ですか？」

「ああ、もちろん」

「だったら……嬉しいです。ありがとうございます」

淡いピンクのワンピースは、私には可愛すぎて着ると少し気恥ずかしいけれど、
拓弥たくみさんに褒められると気分が上がる。

「本当に似合ってる。だけど……やっぱり……」

「えっ……」

途端に鼓動が激しくなり、心音はだんだんと大きくなった。

言葉を交わさなくてもわかる。

私を見つめ返す瞳が、彼も同じ思いだと語っていた。

視線が絡み合ったまま、私はベッドに優しく押し倒される。すぐに、拓弥さんの美しい顔が真上から見下ろしてきた。

「忘れられないんだ。君の体も、声も……。そのワンピースの下に隠している素肌を、今すぐ俺に見せて」

うっとりするような甘い囁きに、体が急激に熱を帯びる。

「あつ、ちよ、ちよっと待ってください……」

「ダメだ、待たない」

「ああっ」

初めて拓弥さんに抱かれた時の、なんともいえない高揚感。「待つて」と言いながらも、それを思い出してしまった私は、あの甘美で悦楽的な感覚を貪欲に求めてしまう。

「綺麗だ……」

「は、恥ずかしい……です」

「なぜ恥ずかしがるの？ 俺はもう詩穂ちゃんのすべてを知っているのに」

数ヶ月前にマンシヨンの隣の部屋に引越してきたこの人に、私はすべてを捧げた。

初めての経験に戸惑いながらも、男性としての魅力に溢れた彼のテクニクの前に、身も心もトロトロに蕩かされた。

「拓弥さ……んっ。ああっ、んっ……はあっ」

桜色の胸の頂に唇を押し当て、優しく舌で愛撫する。

その官能的な行為によって頂が硬く突起してくると、甘噛みし、転がす。そして、舌でペロリと舐めながら、色気に満ちた瞳で私の悦ぶ顔を眺める。

「はあん、ダ、ダメッ……ああっ」

「その声が聞きたかった。詩穂ちゃんのいやらしい顔も声も……ゾクゾクする」

充分なほど胸を愛撫された後、拓弥さんの細くて長い指は私の下着の中に滑りこみ、いきなり蜜口まで到達した。

「もうこんなに濡らして、君は悪い子だな」

拓弥さんの卑猥な言葉が、私の興奮をこれでもかと煽る。拓弥さんに抱かれるまで、自分もこんなにも淫らな人間だなんて思わなかった。

トロトロと粘り気のある愛液が、拓弥さんの指に絡みついていて。彼はその指をうまく使って、私の恥丘を優しく撫で回した。

「はあっ、ああんっ！ ダ、ダメッ、ああっ！」

私ははしたない声を部屋中に撒き散らして悶え、体を反らせて悦んだ。

無我夢中で抱き合う二人の脇にはワンピースと、それに重なるように拓弥さんのシャツとジーンズ……そして下着が脱ぎ捨てられている。

一秒だって我慢できないと、私達は一糸まとわぬ姿でお互いを求め抜いた。

「お願い……拓弥さんの……ください」

もはや私に理性などはない。本能のまま、熱く、硬く、大きくなったモノをねだった。

「これが欲しいの？」

「……はい」

「……可愛いな、詩穂ちゃんは。君が俺を煽ったんだ。もう二度と俺から離れられなくなるけど、覚悟はいい？」

「もちろんです。私を……離さないで……はあっ……ああっ！」

「ああ、絶対に……離さない。最高に気持ちよくしてやる」

拓弥さんの愛で体中が満たされていくのがわかる。

そして、甘い恍惚の世界……極上の快樂へと、二人一緒に昇りつめた。

まだ離れたくない——

そう言わなければかりの熱い抱擁、そして、甘いキス。

あまりにも淫らで濃密な時間を惜しむように、彼は私を強く抱きしめながら愛を囁く。

二度目の情熱的なセックスは、私と拓弥さんをさらに深く結びつける。

美しすぎる隣人からの甘い愛に包まれ、私はもう、あなたしか見えなくなってしまう——

第一章 私の上司は超クールな御曹司

「今日はお鍋にしようかな」

異常な暑さだった夏を越え、ようやく秋を感じられるようになった。

鮮やかな花が次々と咲く春や夏と比べれば少し控えめではあるけれど、さまざまな色を感じる秋が、私は一番好きだ。

マンションの三階。窓から入ってくる清々しい風が、ひらひらとカーテンを揺らす。

キッチンで準備しているのは一人分の鍋の材料。白菜、豚肉、豆腐、しいたけ、にんじん……

ポン酢でさっぱりと食べる鍋は、とても簡単だし、美味しくてヘルシーだと思う。

——ピンポーン。

インターフォンの音——

『は、はいっ』

『……すみません、こんな時間に。隣に越してきた桐生と申します。ご挨拶のため、少しお時間をいただいてもよろしいでしょうか？』

少し低めの男性の声。丁寧で優しい話し方に、ホッと胸を撫で下ろした。

『はい、今開けます』

まずはチェーンをしたまま、ほんの少しだけドアを開けた。
何も……見えない。

「こんばんは」

夜の挨拶と共に、「桐生」と名乗った男性がドアの隙間にサッと現れた。

「……」

音にならない声。

「はじめまして。こんな時間にすみません」

知らなかった――

人間、驚きを通り越すと言葉が出てこないんだ。言いたいことがあるのに、口がまったくうごくとを聞いてくれない。

おまけに体まで動かなくて、まるで接着剤でも塗られたみたいに、ドアノブを持った手が固まってしまった。

「……あ、あ、あの……」

ようやく、ほんの少しだけ息が吸えた。

「大丈夫ですか？」

「あつ、は、はい。ちょっと待ってください」

ハッとして我に返り、急いでチェーンを外してドアを開けると、男性の全身が見えた。
なんと表現すればいいんだろう。

とにかく、頭のとっぺんから足のつま先まで、すべてが「完璧」。

こんなキラキラした人間が実在するなんて。

この世のものとは思えない、恐ろしいほどの最上級イケメンに、私は一瞬で心を鷲掴みにされた。
こんなことは生まれて初めてで、今、感情がぐちゃぐちゃになっている。

「桐生です。よろしくお願います。これ、よかつたら召し上がってください」

目の前に差し出されたのは、某有名百貨店の紙袋。

「……いただいてもいいんですか？」

「もちろんです。美味しいですよ、このメロン。お嫌いじゃないですか？」

「メロン、大好きです！ ありがとうございます。でも、これ……きっとものすごく高価なものですよね？」

そつと覗くと、木箱が入っている。

「いえ、気にしないでください。これから何かとご迷惑をおかけしてしまうかもしれません。どうぞよろしくお願います」

言葉が丁寧で、立ち居振る舞いも素晴らしく、かなり好感が持てる。

「私こそです。あ、あの、何かあったら言ってくださいね。騒音とか……」

「こちらこそ、なんでも言ってください。すみません、お名前をお聞きしてもいいですか？」

「あ！ はい、ええと……私は、むかわ姫川詩穂です。よろしくお願います」

「桐生拓弥です。夕食時にすみませんでした」

「いえ、大丈夫です」

首を横に振る私に対して、少し表情を緩め、ニコツと美しい笑顔が返された。

私の胸に撃ち抜かれたような甘い衝撃が走ったが、決して悟られてはいけないと思い、表情を変えないように必死に取り繕った。

「では……失礼します」

「は、はい。失礼します」

ドアがゆっくりと閉まり、私はその場で大きく息を吸った。たった数分間のやり取りで失われた酸素が、体中に行き渡っていく感じがした。

「なんだったの？ 今のは現実？」

部屋に戻った途端、心の声が飛び出した。

隣に引つ越してきた、桐生拓弥さん。百八十センチはあるだろう高身長で、品のよい高そうなスーツを身にまとっていた。

手足が長くて、全体的に細身な、まるでモデルのような体型だった。

「顔は……」

緊張でしっかり見てはいないけれど、それでも、目を閉じると美しい桐生さんが頭の中に鮮やかに映し出された。

綺麗に整えられた眉、クールでキリツとした切れ長の目、まっすぐ通った鼻筋、色気のある薄め

の唇……

髪型は、清潔感があつてふわっとラフな感じだった。前髪も自然にサイドに流れて、全体的に軽くパーマをかけているようだった。

その姿は、絵本に出てくる王子様のようにキラキラと輝いて見えた。

自分とは不釣り合いなくらい素敵な人の登場に、まだ手が微妙に震えている。

一人鍋の用意は途中のまま、洗面台の鏡に自分自身の顔を映しながら、必死に動揺を鎮めようと頑張った。

「落ち着け……落ち着け……。落ち着くんた、詩穂……」

二十五歳、独身。

見た目普通のOL、性格も……きつと普通。

なんの特徴もない私を見て、桐生さんはどう思ったんだろう？

隣人がつまらない女であることを残念に思ったかもしれない。もしそうだとしたら、ものすごく申し訳ない。でも、なぜ引つ越しの挨拶に来ただけの人に対して、こんなにも悩んでしまうんだろう。

もう、わけがわからない――

私の恋愛経験はたった一度だけ。高校の時に半年間付き合っていた彼氏と別れてからは、恋愛すること臆病おどろびやうになっていた。

だからといって、大学の四年間、そして今も、彼氏がいなかったことをそれほど嘆くこともなく生き

ている。

なのに、この気持ちはなんなの？

これは……いわゆる一目惚れという現象？

私、恋をしたの……？

あまりにも衝撃的な出来事に、私は完全に思考を失ってしまった。

「……いただきます」

それから一時間後、私はようやく夕食を再開していた。

グツグツと煮立つ野菜や豚肉を箸で掴んで、ポン酢へとダイブさせるだけの動作がぎこちない。

美味しいはずの鍋なのに、なんだか食べた気がしない。

私につきまとう不思議な感覚は、歯を磨く時も、お風呂の時も、髪を乾かす時も、パジャマに着替える時も、ベッドに入ってから後も続き、桐生拓弥という名前と、あの美しい顔が頭に焼き付いて離れなかった。

気持ちのいい朝なのに、誰かのせいで寝不足だ。

目覚ましに数回起こされ、残念ながら朝食を食べる時間はなくなっていた。

急いで準備をし、マンションの部屋を出る。

隣からはなんの気配も感じない。

わけのわからない緊張と、安堵。

きつと、桐生さんも会社に向かったんだろう。昨夜はスーツだったから、サラリーマンか何かだろう……

そんなことを考えながら、歩いて十分ほどの会社に向かう。

都会なのに、こんな立地のいい場所にお手頃価格のマンションがあることに感謝しなければいけない。

「おはよう」

「おはようございます」

高層ビルの十二階。

広くて綺麗な空間のオフィスの朝の爽やかな挨拶が響く。

「詩穂さん、おはようございます」

「おはよう。航輔君、今日もよろしくね」

広崎航輔、二十三歳。新入社員の航輔君は、癒やし系のイケメン男子。

ブラウンのマッシュベースに軽くパーマをかけていて、二重のぱっちりした目が可愛いと、とにかく女性社員のハートをがっちり掴んでいる。

おまけに優しく、料理好き。

たまにマドレーヌやスイートポテト、クッキーなどのお菓子を作ってきてくれる、みんなの気者だ。

「よろしくお願いします。詩穂さん聞きましたか？ 今日から赴任される新しい部長って、このグループの御曹司らしいですね」

ほんの少しだけ女子っぽい会話が好きなせいもあって、航輔君はとても話しやすい。

「そうみたいだね。社長の一人息子さんでしょ。かなりのイケメンだって噂になってるね」

赴任してくる部長が御曹司であるということは、数日前から社内にすごい勢いで広がっていた。

若い女性が多い部署だから「イケメン」「御曹司」なんていうワードに敏感になるのもうなずける。

「どんな人なんですかね？ なんだかワクワクしますね」

「ワクワクまではしないけど……」

「そうですか？ イケメンっていう響きがいいじゃないですか。オフィスが明るくなると働きやすいですよ。前の部長はちよつと……」

航輔君の言う通り、前の部長は年齢もかなり上で、見た目にもあまり気を使わない人だったから、みんな男性としては一切意識していなかったようだ。

「確かに優しくてイケメンで仕事ができる人なら嬉しいよね」

「本当に。期待しちゃいます」

私の勤める会社は、テーマパークやレストラン、ホテルなどを経営するかなり大規模なグループ

企業の一つだ。

グループ全体の中では、特にテーマパーク事業が大成を取め、それに付随して、レストランやホテル事業も大きく業績を伸ばし、いまや世界中に展開するまでに大成している。

私は「株式会社H P J」という会社の一員。テーマパークを運営する会社で、資本金は百億円、毎年の売上高は七千億を超えていて、間違いなく日本を代表する企業といえるだろう。

従業員は、関連企業の社員や実際にテーマパークで働くスタッフを合わせて三万人以上もいる。そんなH P Jの本社ビルには、毎日大勢の人が出入りしている。

職種は、テーマパーク関係すべてのマネジメント、人事、経理などの総合職と、専門的な分野で業務にあたる専門職に分かれている。

私が配属されている部署は、専門職の企画部門だ。

一口で専門職といっても、たくさん部門がある。

技術部門は、アトラクションの設計や維持、ITエンジニア、商品などをデザインする仕事。

接客部門は、その名の通りテーマパークの運営、お客様を接客するスタッフなどが所属する。

私がいる企画部門もまた、名前の通り、イベントやアトラクションの企画をおこなっている。集客を担う大切な部門だ。

高校時代に遊びに行ったH P Jが運営するテーマパークが忘れられなくて、非日常を味わえるこの場所に関わりたいたいという単純な理由で入社した。

夢と希望を詰めこんだ会社の一員でいられることに、私は誇りを持っている。

「そろそろ新しい部長が来るね」

「う、うん」

「ドキドキするよー」

「いったいどんな人なんだろう？」

いろんな声が入りこんでくる。

これだけの期待を集める人物に会えるのかと思うと、否応なしに気になってしまふ。

「うわあ!!」

「嘘……」

「ちよつと、想像を超えた」

「こ、腰が抜けちゃいそう」

高級感溢れる細身のスーツに身を包み、眩いばかりのキラキラオーラをまとった男性が、オフィスのドアから颯爽と現れた。

「えっ……」

私はその瞬間、心臓が止まるほどの衝撃を受け、どうしようもなく動揺した。

だって、そこにいたのは、昨夜出会ったばかりの「桐生さん」だったから——

「おはようございます。皆さん、はじめまして。桐生拓弥です」

にこりともせずそう挨拶した彼に、「なぜここにいるの?」と心の中で何度も問いかける。心音はどんどん大きくなり、このまま床に倒れこんでしまわないか心配になるほどだった。

もちろん、周りの女性達も、自己紹介する新しい部長を食い入るように見て目を輝かせている。

うちの会社が桐生グループの中の一社だということを忘れていた。

まさか、桐生さんが「桐生グループ」の御曹司だったなんて——
でも不思議だ。

「この人は本当にあの桐生さんなの?」と、違和感を覚える。

頭を下げる姿には昨日と同じ誠実さを感じたけれど、昨晚とは雰囲気が決定的に違っていった。

別人だと思わせるほどに冷静でクールな佇まいで、笑顔が素敵な「優しくて穏やかな桐生さん」
との大きなギャップを感じる。

まだよく知りもしない人だけれど、冷たい様子に彼を一層遠く感じて少しだけ悲しくなった。
短くて簡潔な挨拶の後、桐生さんは、前の部長が座っていた椅子にすつと腰かけた。

企画部門から別部署に移った前の部長は、タヌキみたいにコロコロしてお腹もずいぶん出ていたから、見た目は月となんとか……くらいの差があった。

冷たく見えるとはいえ、スーツ姿の桐生さんは、ただ座って電話をしているだけなのにどうしてあんなにキリッとしてかっこいいんだろう。

「いったいこの人のどこに欠点があるというのだろうか?」

「詩穂さん、大丈夫ですか? どうかしましたか?」

「えっ? あつ、航輔君」

「さつきから挙動不審ですけど」

「え！ わ、私が挙動不審？」

「はい、かなり」

「そ、そ、そんなことないよ。全然普通だよ。いやだな、変なこと言わないで」
ダメだ、一旦冷静にならなければいけない。

私は小さく深呼吸を繰り返した。

昨夜、あんなに優しい笑顔と言葉で挨拶してくれた桐生さんは、一度こちらを見たり、一ミリも私と目を合わせてくれない。

昨晚とはまったく違う様子に、さつきから頭が混乱しっぱなしだった。

「桐生部長は本当に素敵な人ですね。さすがは桐生グループの御曹司」

航輔君は桐生さんの話をしてくる。正直、違う話題に変えたいと思った。

「う、うん。だけど、ちよつと怖そう……かも」

「確かに。でも、僕はああいう大人になりたいです。まあ……あと百万年は無理かな」

「百万年って。航輔君には航輔君のよさがあるんだし、今のままで充分だよ」

「……ですかね？ でも、結局、詩穂さんも桐生さんみたいな男性が好きなんですよ？」

核心を突かれ、急に脈が早くなる。

「ま、まさか。私なんてあんなイケメン御曹司に好かれるわけないし」

「……やっぱり、興味があるんですね」

「えっ……ち、違うよ。違う違う」

航輔君の疑いの眼差しがチクツと痛い。

「おい、姫川、広崎！ 早く企画資料をまとめて出してくれ」

「あつ、はい！ すみません、すぐやります」

先輩に言われて、慌ててやりかけの仕事に戻る。

桐生さんのことは一旦置いておこう……と、かなりの無理難題を自分に課して、私はコピー機の前に歩を進めた。

その時、私のすぐ横をフワツと高貴な香りが通り抜けた。

「えっ、ちよつと、あれ誰？」

「うわあ、めちやくちや美人なんだけど」

また、オフィス内に新たななどよめきが起こった。

「桐生部長。そろそろ会議のお時間です。ご準備をお願いします」

「ああ、わかった」

周りの声など気にも留めず、まるで彼女か奥さんのように桐生さんに声をかけたのは、あまりにも美しく、聡明さを感じさせる女性だった。

見たこともない美麗な人間が、同じ空間に二人もいると、さすがに頭がバグる。
これは現実なのか——と。

「わあ、沙織さんじゃないですか！」

「あら、どうも。お久しぶりね」

「どうしてここに？ 確か……海外勤務でしたよね？」

企画部門の女性の先輩が、親しげにその美人に問いかけた。

「ええ、そうよ。つい最近日本に戻ったの。やっぱり日本はいいわ。また、よろしくね」

「よろしくお願ひします。でも、沙織さん、秘書さんなんですか？ 以前は違いましたよね？」

「突然ね、拓……桐生部長に秘書になれて言われたのよ。ほんと、迷惑な話よね」

「すごい、さすが沙織さん！ 桐生部長のお気に入りなんですネ」

「……お気に入り、ね」

「城之内じょうのうちの。行くぞ」

桐生さんは、城之内沙織さんという秘書の女性を連れ、部屋を出ていった。

いったいなんだったんだろう。

吹き荒れた嵐がスーッと消えていったかのような、わけのわからない状況に心がざわつく。

「綺麗ですね。あの人、元広報部の城之内さんですよ？ 海外に行つてさらに美しさに磨きがかかった気がします」

震える手で必死にコピーをしていると、隣でさっきの先輩が誰かと話す声が聞こえた。

盗み聞きしているみたいで気が引けるけれど、私の耳はそれを聞かずにはいられない状態になっていた。

「うんうん、前から美人だったけどますます綺麗になつてるよね。広報部にいた頃から憧れてたの。

すぐに海外勤務になつて残念だなと思つてたけど、……まさか今度は桐生部長の秘書だなんてびっくりだよね」

「桐生部長と秘書さん。美男美女で惚れ惚れします」

「本当にイケメンと美女だよね。あの親密な感じからして、二人つて……」

「いやだあ、本当ですか。桐生部長、めちゃくちゃイケメンだし、私、狙っちゃいたいです」

「確かにあんなに素敵なのが彼氏だったら自慢になるよね。私も狙つてみようかな」

話す声がとても楽しそうだ。

女性達は早速桐生さんをターゲットにしている。

だけど、すぐ近くにあんな美人で、しかも英語も堪能らしい優秀な秘書さんがいたら……私は、ようやくできた資料を手に、複雑な気持ちのまま席に戻つて仕事を続けた。

マンションに帰り着いた途端、一息つく暇もなくインターフォンが鳴った。

このタイミングに来るのは、いつもの彼女。

「お疲れ様〜」

「お疲れ、るか溜香」

「今、帰つてきた？」

「うん」

帰りの時間を見計らって私を訪ねてくる彼女は、同じマンションの二階に住んでいる高校時代からの同級生、佐和田瑠香。

百五十六センチで少しぼつちやりしている瑠香は、唇がポテツとして可愛い女性だ。ブラウンの肩までのボブスタイルが、さらに女性らしさを引き出している。

二十五歳にしては少し幼く見られるのが悩ましい。

「お腹空いたし、何か食べに行かない？」

「ごめん、今日は疲れてて。早く休もうかと思ってたから」

「じゃあ仕方ないね。なんでもいいや」

「あつ、瑠香。ごめん、今日は……」

私の言葉は虚しくも届かず、瑠香はもうまるで自分の部屋のようにリビングに向かっていった。

ため息と共に瑠香の靴を揃え、背中を追いかける。

「ねえねえ、聞いたわよ。桐生グループのイケメン御曹司が企画部門の部長になったって。私、今日は休みで会えなかったから、明日絶対見に行くね」

瑠香は接客部門に在籍し、テーマパークで働くスタッフの衣装の管理を担当している。

「そうだね。確かにイケメン……だよ」

「やっぱりそうなんだあ！」

「う、うん」

私はなぜか、桐生さんが隣に引越してきたことを瑠香に言えなかった。

「楽しみだなあ。そんなにイケメンなんだね。なんだかドキドキする」

「でも、桐生さん……桐生部長には専属の秘書さんがいてね。ものすごく美人だから、狙ったとしても誰も敵わないよ、きつと」

「え。そうなの？」

「うん。本当に女優さんみたいに綺麗だった」

「でも、美人は性格悪いって決まってるからね」

「そ、そうかな？」

「そうだよ。そんなのうまくいかないよ、絶対。それに、桐生部長の彼女の座は誰が狙ってもいはずだし」

「……う、うん、だね」

確かに、瑠香のこの笑顔はとても魅力的だ。男性ならすぐに惹きこまれるかもしれない。

でも……

「ねえ、早く。お腹空いた。チャーハンなら簡単でしょ？」

「……うん、ちょっと待ってね。すぐ用意するね」

瑠香は「疲れているから今日は帰ってほしい」と言っただけで帰る人じゃない。それは昔から変わらない。

瑠香とは、高校時代に同じクラスになってすぐに友達になった。

明るくて元気で、みんなの人気者だった瑠香。男子にもモテていた。

そんな彼女が私みたいな大人しい人間を相手にしてくれたことが素直に嬉しくて、よく一緒にいるようになり、気づけば勉強したり遊んだりする仲になっていた。

二人とも桐生グループが経営するテーマパーク——「HappyPlaceJapan」、通称「ハビプレ」が大好きで、よく一緒に出かけた。

瑠香とは大学も同じで、ハビプレのメインキャラクター、ネコの「ニケ」が二人とも大好きだったから、年間パスを買って一緒に何度も何度も遊びに行った。

ハビプレには、ニケの形をしたニケストーンという小さな宝石が十箇所埋めこまれているらしく、遊び心溢れる演出にも夢を感じた。

ハビプレはいつだって楽しくて、行くとまるで夢の世界にいるような気分になる。

ハビプレのお客様——「フレンド」としてだけでなく、ハビプレで働く「ガイド」側になりたい、という気持ちを持つようになった。

そしてその想いは瑠香も同じで、「将来はここで一緒に働きたいね」と同じ夢を抱くようになっていた。二人とも内定をもらえた時は、手を取りあつて喜んだっけ……

「美味しい！ 詩穂のチャーハンは最高だよね」

そう言われると正直嬉しいし、瑠香の訪問を心から断れない自分がいる。

でも、今は一人でゆっくりしたい気分だった。

「彼氏できたんでしょ？ 早く帰らなくて大丈夫？」

こんな言い方で気づいてくれる相手ではないと、充分わかってはいるけれど……

「大丈夫だよ。彼氏にはまた後で連絡するから」

「そっか……」

やっぱり帰る気配はない。

「今度彼氏とハビプレ行くの。見つからない十個目のニケストーン、今度こそ見つけるからね！」

「あっ、うん。見つかるといいね」

瑠香は彼氏と一緒にだから、見つかっても見つからなくても楽しいはず。

私にはもうずっと……彼氏がいない。

高校の時にできた彼氏が、最初で最後。

「詩穂も早く彼氏作ればいいのに。デート楽しいよ」

「……だよ。でも、特に望んでないから」

「やだ、詩穂は奥手なんだから。誰か探せばいるんじゃない？ 詩穂でもいいって言ってくれる男性」

「そんな人……いないと思うし、本当に今は仕事が大事なの」

「寂しいこと言わないの。今度、誰か紹介してあげようか？ 彼女欲しいって言ってる男、周りにたくさんいるし」

「本当にいいの。本当に……」

高校時代も、大学時代も、そして今も、瑠香はまったく同じことを言っている。だけどね、瑠香。

私が彼氏を作らないのは、怖いからだよ。

また、あなたに盗られるんじゃないかって――

でも、私には瑠香を強く責めることはできない。

「ご馳走さま。じゃあ、帰るね。またね」

また……来るんだね。

同じマンションだし、同じ会社。

ただ「友達」という言葉だけでは表現しきれない、私達の関係。

いつまで経ってもこの関係は変わらない。

私と瑠香は、切っても切れない絡まった糸で、強く結ばれているのかもしれない。

第二章 思いがけないおすそ分け

瑠香が帰って一息ついた時、またインターフォンが鳴った。

まさか――

心臓の音が急に騒がしくなった。

変な期待はするもんじゃない。

また瑠香かもしれないし、宅配便かもしれない。

「は、はい」

ほんの少しだけ、わざと無愛想に返事をした。

「すみません。隣の桐生です」

「えっ」

「両親から果物が送られてきて、よかつたらもらってくれませんか？ 一人では食べきれないので」

ドアの向こうから桐生さんの声が聞こえる。「まさか」が起こり、胸が高鳴った。

「あっ、ちょ、ちょっと待ってください」

すぐそこに桐生さんがいると思うだけで、どうしてこんなにドキドキするのだろう。

私は、慌てて手ぐしで髪を整え、かすかに震える手で恐る恐るドアを開けた。

「あ……こ、こんばんは」

「こんな時間にすみません」

ドアの向こうには、にこやかな桐生さんが立っていた。

「あの、いや、えと、今日……会社で……」

「食事は終わりましたか？」

私の言葉を遮るように飛んでくる質問。

「え？ いえ……まだですけど……」

チャーハンを作ったけど、自分では食べていなかったからお腹は空いている。

だけど、そんなことよりやっぱりおかしい。この人は……今日会社で会った桐生部長？

どう見ても同じ人物なのに、あまりにも様子が違いすぎる。

会社では、必要以上に愛嬌を振りまかない、ともすれば冷たいとさえ感じる態度だった。目も合

わなかったけれど、今はまったく違う。笑顔も言葉も、とても優しい。

もしかして桐生部長とは双子の兄弟とか？ でも、同じ名前だよね……

心の中が疑問で溢れかえる。

「食事の前にすみません。よかったら、部屋に果物を取りに来てもらえますか？」

「えっ？ そ、それはちよつと……」

「遠慮なく。さあ、どうぞ」

「えっ、あ、あの、ちよつと」

背中に触れられ、誘導される。

かなり強引な桐生さんに驚く暇もなく、触れられている事実を頭を支配された。

手のひらの感触がダイレクトに脳に届く。

体中の神経が一瞬で敏感になった。

強引だけど、手付きは優しい。この感じなら、サツと振り払って逃げることは容易にできる。な

のに私はされるがままで、気づいたら隣の桐生さんの部屋に入っていた。

「どうぞ、リビングに」

「あっ、は、はい。お邪魔します……」

とりあえず挨拶をしたものの、一気に緊張が押し寄せてくる。

私の家と、ほぼ同じ間取り。

だけど、男性一人暮らしの部屋に入るなんて初めての経験で、どこを見ればいいのか困ってしま

まう。
なんなんだろう、この状況は――

「これ、メロンにナシにリンゴ、ミカンもありますから」

「うわっ」

リビングのテーブルの上はパラダイスだった。色とりどりのたくさんのお菓子が、高級そうな箱に入

きつとどれも甘くて美味しいのだろう。

「こんなにたくさんご両親が送ってくださるんですか？」

「ええ」

「ものすごくうらやましいです。ご両親、お優しいですね」

「三十歳のいい大人がまだ独身なので、親には心配ばかりかけています」

三十歳……

「だからこんなにも大人の色気があるんだ」と、心の声が漏れそうになるのをグツと堪えた。

「そうなんですか……」

「早く彼女を作りなさいと、母親がうるさくて」

「えっ？ 彼女さん、いらっしやらないんですか？」

「ええ、まあ。お恥ずかしいですが、いません」

じゃあ、あの美しくて優秀な秘書さんとは……いったいどんな関係？

彼女は「桐生部長」と言い直していたけど、下の名前で呼んでいるようだった。秘書に指名されたというような話もしていたし、近い関係であることは間違いないだろう。

桐生さんの話は、本当なのか、嘘なのか、真偽がわからない。

「あの……その、あなたは桐生グループの御曹司ですよね？」

頼りない勢いではあるけれど、疑問をようやく口に出せた。

「……そうですね。はい」

「やっぱり、桐生部長ですよね？ 今日、オフィスでお会いました」

「……」

桐生さんは切なげな表情で数秒黙りこんだ。それを見て、私はとんでもない質問をしてしまったと後悔した。

「あつ、ご、ごめんなさい。変なことを聞いてしまつて」

「いえ、謝らないでください。あなたが悪いわけではないので」

「立ち入ったことを聞いてすみません。今日会社で会った時の桐生部長とは雰囲気が違う気がして、つい確認してしまいました」

「……だよね」

「え？」

桐生さんはミステリアスで艶っぽい表情でこちらを見た。そんな彼に、また心を掴まれる。

「じゃあ……いいかな。話し方、少し崩させてもらう」

「あつ、は、はじ」

どう答えればいいのかわからず、なんとか返事をする。

「どうしても肩書きで見られるから、それに合う言葉遣いになっているんだ」

敬語がなくなり、「俺」という一人称になぜかキュンとした。

「でも、俺の素はこっち。俺は、ごく普通の人間だから」

「普通？ 普通……ではないと思いますが」

「……」
彼が言葉を詰まらせ、ほんの少し俯いた隙を狙って、私は「今がチャンス」とばかりに桐生さんの顔を食い入るように見つめた。

異次元的な魅力を持つ彼の美しさは、この距離で見ると卒倒してしまいそうなくらい破壊力がある。

こんな素敵な人と同じ部屋の空気を吸っているなんて信じられない。

「あ、あの……変なことばかり言って困らせていますよね。すみません」

「いや、いいんだ。まあ、せっかく同じ会社で働くことになったんだし、マンションの部屋も隣同士で、これも何かの『縁』だと思う。だから、今から俺と君、お互い苗字じゃなくて名前で呼び合わないか？」

「えっ！ な、名前呼び？ 名前で呼ぶんですか？」

「そう。名前」

「そ、それはちよつと……」

「詩穂ちゃんだよ。よろしく」

し、詩穂ちゃん！

思いもよらない呼ばれ方に腰が砕けそうになる。

私は、近くにあったテーブルに手をつけて、かろうじてその難を逃れた。

「あ、あの、はい。よ、よろしくお願いします」

返事をしたものの、何が「よろしく」なのかわからない。

だけど桐生さんは、気が動転している私のことはお構いなしに続けた。

「俺は、拓弥だから」

「……あ、えと」

「た・く・み」

「あっ……た、く……」

そんなの、スムーズに言えるわけもなく、たった三音なのに舌がもつれる。

「ゆっくりでいいから言ってみて」

「た……く。あ、あの、やっぱり……」

急激に体が熱くなる。

この状況が恥ずかしくない。

「力を抜いて。さあ」

「え、あ、はい……た、く……み……さん」

「言えた言えた。その調子」

あまりに優しい眼差しと温かな励まし。幼稚園児みたいに扱われている。

でも、桐生さんの笑顔を見ると、すごく幸せな気持ちになるから不思議だ。

こんなに特別に素敵な人が普通？

とてもそうは思えなかった。

桐生さん——拓弥さんにとってはこれが普通なのだろうか？
私には、本当によくわからない。

「……じゃあ、遠慮なく……拓弥さんと呼ばせていただきます」

「もちろん。これからお隣さんとして仲良くして。詩穂ちゃん」

これが「顔から火が出る」という状況なのかと、身をもって知った。

「は、はい、こちらこそ。よろしくお願ひします」

「果物、どれがいいかな？」

「ありがとうございます。えっと……」

どれか一つ二ついただこうと思ってテーブル上の果物を見るけれど、どれも美味しそうではない。それに、拓弥さんのご両親が拓弥さんを思って送ったものだと思つと、気が引けてしまう。

そんな私に気づいたのか、拓弥さんはミカンをひよいと取り上げた。

「じゃあ、俺はミカンが好きだから、一個だけもらうよ。あとは詩穂ちゃんが食べて」

「えっ！」

「メロン、好きだつて言つてたよね？」

「で、でも、昨日の夜にももらいましたし、さすがに厚かましいです」

「構わないから。そうだ、誰かに分けてあげるといい」

「でも……」

「遠慮しなくていいから」

こんなにたくさんもらうなんて申し訳ない。

断つたけれど、拓弥さんはどこからか紙袋を出してきて、手際よく果物を詰めて私に持たせた。紙袋を持たされた私は、眉を下げる。

「こんなに美味しそうな果物、本当にいただいてもいいんですか？」

「ああ。どうせ一人じゃ食べきれないだし」

一人……本当なのだろうか？

「すみません。じゃあ、私の家族に……」

「いいね。ご家族は果物は好き？」

「はい！ それはもう。みんな大好きなんです。特にメロンには目がなくて。絶対に喜びます」

「それはよかつた。ご家族は近くに住んでるの？」

「車で二十分くらいのところにいます」

「だったら一緒に持つていってあげる」

その言葉に驚いて大きな声を出してしまふ。

「そ、そんなそんな！ 大丈夫です。父に車で取りに来てもらいますから。そこまでしてもらうのはさすがに……」

「わざわざ取りに来てもらうなんてよくない。俺が持つていくから。明日、仕事が終わつてから二人でお届けしよう」

慌てる私なんてお構いなしに、拓弥さんは話がまとまつたとばかりにうなずいた。

これは夢なの？

あまりの急展開にまたパニックになる。

昨夜から今まで、超高速ジェットコースターに乗っているような気分だ。

「……本当にいいんですか？」

「もちろん」

「あ、ありがとうございます」

「じゃあ、明日。帰ったら連絡するから。いいね？」

「わかりました。よろしくお願いします」

すぐ隣だというのに、拓弥さんは私の家のドアの前まで送ってくれた。

先程の強引さなんてなかったかのように「おやすみ」と紳士的に挨拶した後、拓弥さんは隣のド

アに吸いこまれていった。

部屋に戻った瞬間、ソファにダイブするように横たわり、私はただぼーっと天井を見つめた。

「そっか……ご飯食べてなかったな」

拓弥さんと話した後は、緊張からか食べたいという欲がすっかり消え失せてしまう。

ずっと上手くいっていないダイエットが、今度は成功しそうだ。

もし痩せたら、拓弥さんにいいなと思ってもらえるのかな？

……なんて、とんでもなくバカなことを考えている私は、本当にどうかしてしまったのかもしれ

ない。

私のことなんて拓弥さんは意識していないのに、勝手に期待している自分が恥ずかしくなった。

「こ、こんばんは……。こ、言葉が出ない……」

「ほ、ほんとね。お母さんも長いこと生きてきたけど、こんなに素敵な人は見たことないわ。なんだかドキドキしちゃうわね」

「母さん、真穂も。なんでお前らがドキドキしてるんだ？」

「だってお父さん。こんな王子様みたいな人が目の前に現れたら、誰だって冷静でいられないわよ。ねえ、真穂」

「う、うん」

順番に、妹の真穂、私のお母さん、お父さん。

三人は、いきなり私とともに訪ねてきた拓弥さんを見て大騒ぎしている。

気持ちは痛いほどわかるけれど、ちょっとはしゃぎすぎだ。

「すみません、突然お邪魔して。私、詩穂さんの会社で部長をしております、桐生拓弥と申します。たまたまお嬢さんと同じマンションに引っ越してきました……」

「詩穂から電話で聞いていますよ。桐生さん、よく来てくれました。まさか、詩穂の彼氏がこんな

イケメンだなんて、お母さん、天にも昇る気持ちだわ〜」

「お母さん！ 違う違う。彼氏じゃなくて上司って言ったでしょ？」
とんでもない勘違いに慌てて否定する。

「えっ、お姉ちゃん、彼氏を連れてきたのかと思ったのに」
本気で残念がる真穂に、こちらが驚く。

「あの、桐生さん。本当に詩穂の彼氏じゃないんですか？」

「お母さん！ だから違うんだって」

「それはご想像にお任せします」

「ちよつ、ちよつと桐生部長。変なこと言ったらみんな誤解しますから。うちの家族はものすごく単純なので」

「単純って。素直だって言ってくれる？」

妹の真穂が私の顔を覗きこむ。

ひとつ下の真穂とは、昔から仲良し姉妹と言われていた。

今でもよく話すし、いろいろ相談できる、友達みたいな関係だ。

大人になっても、愛想がよくて元気なところは昔から何も変わらない。

「部長、すみません。みんな、本当に部長が彼氏なわけないから。彼氏を連れていくなんて言っていないでしょ」

隣で微笑んでいる、私なんかとはまったく釣り合わない拓弥さん。

恋人同士に見えるはずがない。

「じゃあ、私、桐生さんの彼女に立候補しようかしら」

「お母さん何言ってるの？ お母さんにはお父さんがいるでしょ」

「あら真穂、わかつてるわよ。いいじゃない、少しくらい夢を見させてくれたって。こんなに素敵人にはこの先二度と出会えないんだから」

お母さんは、拓弥さんに向けて両手を合わせて祈りだした。

「詩穂さんのお母さん、お名前をお聞きしてもよろしいでしょうか？」

「浅子です！」

目を輝かせながら、拓弥さんの質問に食い気味に答えるお母さん。

お父さんひとすじの優しく明るいお母さんは、私の自慢の母親だ。

でも、今は完全に乙女の顔になっていて、こんな一面もあったんだとちよつと可愛く思えた。

「浅子さん。これ、果物をお持ちしました。もらい物で申し訳ないですが、よかつたら皆さんで食べてください」

「あらまあ、嬉しいわ。それに、浅子さんだなんて幸せすぎる」

果物よりも「浅子」呼びされたことに喜んで、「両手で頬を包み、本気で照れまくっているお母さん。」

お父さんは呆れ顔をしているけれど、お母さんはまったく気にしていない様子だ。

「桐生さん、できれば私も『真穂』でお願いします」

真穂まで手を合わせて拝んでいる。二人とも、拓弥さんをご利益のある仏様か何かと間違えているようだ。

それでも、さつきから嫌な顔一つせず、ずっと笑顔を絶やさずにいてくれる拓弥さんは……もしかして本当に仏様なのかもしれない。

「真穂さんも、果物はお好きですか？ よかったらたくさん食べてくださいね」

「は、はい！ ありがとうございます！」

笑顔満開で喜ぶ真穂。

「お前ら、いいかげん恥ずかしいからやめなさい。本当、しょうがないな。すみません、桐生さん」

見るに見かねてようやくお父さんが口を挟んだ。

「いえいえ。楽しい時間を過ごさせてもらって、とても嬉しいですよ」

「あなたみたいな性格もいい男前だったら、キチンとしたお相手もいるでしょうに。うちの女性達に気を使ってもらって、本当にすみません」

「あ、いえ」

「それに、こんなにたくさんさんの果物、よろしいんですか？」

「もちろんです。大事な詩穂さんのご家族の皆さんにぜひ、と思ひまして。それと……私にはお付き合っている方はいません」

拓弥さんははつきりと言った。

私にはまだ信じられないけれど……断言するのを聞いて、もしかすると本当に決まった人がいないのではと身勝手にも心が浮き立ってしまう。

「まあ、本当に？ ということは、やっぱり詩穂と？」

「お母さん、だから違うの。私はね、桐生部長のただの部下だから」

自分の言葉ではっとする。

そうだ、私はただの部下。

それなのに、拓弥さんの言葉一つ一つに一喜一憂してしまうのが情けない。

「とにかく。詩穂のことを大事だなんて……なんだかすぐ嬉しいわ。桐生さん、本当にありがとうございます。これからも詩穂のこと、どうぞよろしくお願いします」

「はい、浅子さん。詩穂さんのことは私にお任せください」

「き、桐生部長は、仕事上で私を大事だと言ってくださってるんだからね。本当に勘違いしないでね」

拓弥さんはまだ微笑んでいる。

会社での顔とはまったく違う、穏やかな表情に安堵したけれど、かなり騒がしくしたことは後でちゃんと謝ろうと思った。

「桐生部長、そろそろ帰りましょう」

「お姉ちゃん、桐生さんと一緒にご飯食べていけばいいのに」

「そうよ、真穂の言う通り。食べていってくださいよ。もうすぐ真穂の旦那さんと孫も帰ってくる

んで」

「ダメよ、お母さん。仕事終わりで部長は疲れてるんだから」

「いえいえ、疲れてないですよ。ですが、今日は帰ってからも仕事がありますので失礼します。また、改めて伺ってもよろしいでしょうか？」

「もちろんです!!」

お母さんと真穂が声を揃えて答えた。

「家族みんなで楽しみにしていますからね。桐生さん、必ず来てくださいよ。そうだわ、お父さん、和菓子を」

「用意してあるよ。お口に合うかどうかわかりませんが、うちの和菓子です。よかつたら……」

「ありがとうございます。とても綺麗ですね。一つ一つ違う花の形をしていて、食べるのもったいないです」

拓弥さんはまじまじと和菓子を見つめている。小さな和菓子を手にとって見るその姿が、なんだか可愛らしい。

「あらやだわ、褒められちゃった」

「喜んでもらえてよかつたね」

お母さんと真穂が手を取り合って喜んでいる。

「帰ってからゆっくりいただきます。本当にありがとうございます」

「桐生さん。これに懲りず、また足を運んでください」

お父さんは、頭を下げた。

「はい。またぜひ」

「待っていますよ」

きつと、お父さんも桐生さんのことが気に入ったんだ。

私達にはぎやかな実家を後にし、車で二十分ほどの道を帰った。

「今日はわざわざ車を出していただいてありがとうございます」

「気にすることはないから」

「それから……ずいぶんうるさくしてすみませんでした。あんなに喜ぶ母と妹を見たのは初めてです。それに父も」

「うるさくなんてないよ。こちらこそ、詩穂ちゃんの素敵なご家族にお会いできて、しかもお土産までいただいて、本当にいい時間を過ごさせてもらった。和菓子屋を営んでおられるなんてすごくうらやましいよ」

「そんな。桐生グループからしたら、うちの和菓子屋なんて小規模すぎて見えないくらいです」

「とんでもない。とても綺麗で立派な店構えだった。素晴らしいお店じゃないか」

「本当ですか？」

「ああ。君は優しいご家族に囲まれて育ったんだな。きつといただいた和菓子はとびきり美味しいんだらう。後で食べるのが楽しみだ」

こんなにも私の家族を大事にしてくれる男性は初めてで、心が温かくなる。自分を普通だとした拓弥さんの言葉には、今もあまり同意できないでいる。

でも、御曹司として何不自由なく育ってきた彼にはふさわしくない、あのマンションに引越してきたことや、今日の反応を思うと、やはりこの人の感覚は「普通」を求めている。

今日は、それが手に取るように感じられた。

「家族は拓弥さんが御曹司だなんて知らないですけど、間違はなくみんな拓弥さんのファンになりました。特にお母さんは」

「だいたいけど。君のご家族はみんな大事にしたいから」

「……あ、ありがとうございます。恐縮しますけど、やっぱり嬉しいです。ありがたいとか……。今日はいませんでしたけど、うちにはまだ真穂の旦那さんの将太君と甥っ子の太一もいるので、普段からすごくにぎやかなんです」

「にぎやかな家庭って、すごく素敵だと思うよ。真穂さんの旦那さんや太一君にも会ってみていな」

「将太君は気さくで元気な楽しい人で、拓弥さんの一個下の二十九歳です。甥っ子の太一は三歳で、可愛いんですよ」

「そっか、ますます皆さんに会いたくなかった。次はいつ行こうか？」

「えっ」

「あまり続けてお邪魔するとご迷惑かな」

「あ、あの、拓弥さんはお忙しいんですから、うちのことなんて気にしないでください。お仕事を優先して……」

「俺が会いたいんだ」

「え……」

「君のご家族には会っておきたい」

「本当にまた実家に来るつもりなの？」

「それともただの社交辞令？」

「私の家族に会う必要などないはずなのに……拓弥さんの真意がわからない。」

「あ、ありがとうございます。うちはいつでも大歓迎ですよ」

「なら、また近々。和菓子のお礼もしたいし」

「和菓子は果物のお礼ですから」

「よくしてもらったからお礼がしたくなるな。また、一緒に」

「は、はい。ありがとうございます」

もうマンションに到着した。

あつという間の時間だった。

「じゃあまた明日」

「はい、また……明日。おやすみなさい。今日は本当にありがとうございました」

「おやすみ」

私達はお別れの挨拶を交わし、それぞれ部屋に戻った。

ようやく緊張とドキドキから解放され、私は冷蔵庫に入っていたペットボトルの水を勢いよく口にした。

そのままソファに座ると、当たり前のようにいつものぼーっと考える時間が訪れた。

拓弥さんは私の上司――

本当ならプライベートで関わることなんて絶対にできない立場の人。

なのに、なぜか今日はわざわざ実家にまでついてきてくれた。

どうして私と……そして、家族にあんなに親切にしてくれるのだろうか？

もちろん嬉しいけれど、疑問がどんどん湧いてくる。

「あつ、ちよつと待って。そっか……」

ある思いが私の頭をよぎった。

拓弥さんは、もし隣の住人が私ではなく留香だったとしても、きっと仲良くしていた……

たまたま偶然、私が隣人になっただけなんだ――と。

一瞬で胸が締め付けられる。

彼氏を連れて来ない娘を心配している両親は、勝手に誤解して「とうとう詩穂にも春が来た」なんて言ってた。だけど、拓弥さんが私の彼氏になることは絶対にありえない。

さまざま考えを巡らせると、だんだん気持ちが重くなっていく。

だけど……

同時に、私はこの奇跡ともいうべき出会いに感謝したいと思った。

たとえ、ただの偶然で、彼に私への恋愛感情がなかったとしても、私はもつと拓弥さんのことを知りたい。

自分の想いは隠しながら、ほんの少しずつでいいから、拓弥さんと一緒にいる時間を増やしたい。

隣で顔を見ていたい。

あなたを近くで感じていたい。

会いたいよ……

さっきまで一緒にいたのに、もう、あなたに会いたくなってる。

今ならちゃんとわかる。

私は間違いなく、桐生拓弥さんに恋をしてしまったんだ――

「こんばんは」

「うわっ！」

「そんなにびっくりしないでくださいよ。会社でもお会いしてますし」

「あつ、ああ……き、君は？」

「私の名前、覚えてくれてますか？ 自己紹介しましたよね？」

そう言っつて、私は桐生部長を見つめた。

実は、ばったり会ったフリをするため、マンションのエントランス辺りですばらく彼の帰りを待っていた。

おかげで話すことができた。オフィスで見た時よりさらにイケメンで、ものすごくドキドキする。

「……すまない」

「嘘つ、忘れちゃいました？ 私は接客部門の佐和田瑠香です。同じマンションに住んでも伝えるましたよ」

すぐ目の前の桐生部長は、驚異的な美形だ。

それにしても、詩穂は部長がここに住んでいることを私に言わなかった。

なぜ黙っていたのかを問い詰めたら、プライベートなことだからって。

詩穂が隠しているのも女性社員達は耳が早いからすぐ分かるのに。

「今は同じ部署のメンバーを覚えている途中だ。接客部門まではまだ……」

歩きながら話す桐生部長の速度に合わせ、私は小走りで後を追った。

「だったら早く覚えてくださいね。私のことは、瑠香でいいですから」

「……名前呼びはしない主義だ」

「えっ、そんなの、なんだか寂しいですよ。私、仲間みんなでワイワイ楽しく仕事がしたいです。

だから、瑠香で大丈夫ですよ。ちゃん付けで」

シャイな人にはグイグイいくしかない。

こういうお堅いタイプは女性から押されないと動けないから。こうやって、私はいつも彼氏にしてきた。

だから今回だって……

「社員同士、親しくなりすぎるのも問題だ」

「えっ」

「そのあたりはよく考えながら行動してほしい。特に、君は接客部門だから、どうすればお客様に喜んでもらえるか、それを第一にしっかり考えてもらいたいか、堅い。」

真面目すぎるでしょ？

立ち読みサンプル
はここまで

あまり目も見えてくれないし。
イケメン御曹司なんだから、もっと女性の扱いに慣れててもいいのに。
もしかして、照れ隠しなの？

「私はテーマパークが大好きで、特にハピプレにはプライベートで数えきれないくらい通ってます。部長が思う以上に私はハピプレのことを考えてますから」
ちよつとムツとして、わざと冷たく言っちゃった。

「……それはすまない。ハピプレのことを考えてくれてるのは……すごくありがたい。これからもお客様のために頑張ってもらいたい」

「もちろんです！ 任せてください」

「だからといって、社員同士がなれ合うのはよくないから」
「えっ……」

「名前で呼ぶのは控えさせてもらう」

「そ、そうなんですネ……。わかりました」

私、こういうお堅いところも意外と好きかも。

クールすぎる部長だけど、なんだか可愛く思える。

「じゃあ、ここで。お疲れ様」

「あつ、あの、ちよつと」

桐生部長は一人でエレベーターに乗っていった。

「行っちゃった……まあ、いいや」

桐生部長。私、イケメンで御曹司のあなたのことが好き——

私は誰よりも幸せになりたい。

特に、詩穂よりは、絶対に。

詩穂と私の関係がただの友達ではなくなったのは、あの子の和菓子屋が困っている時にうちの両親が援助してあげてからのこと。それから詩穂は私に頭が上がらない。

だから、高校の時、私が詩穂の彼氏を奪っても、あの子は私を怒れなかった。

悲しくて悔しいはずなのに、そんな顔は見せず、文句一つ言わなかった。

あの子の上に立てて気分が良かったのに、あの時の泣きもせず冷静な顔を見て腹が立った。

見た目も人気も成績も、当然、何でも私のほうが上。

桐生部長は、私が必ず手に入れる。

恋人同士になって、詩穂をうらやましがらせたい。

私を超えることはできないと、何度でもわからせてあげないと。

だって、だって……

高校一年の時、私が大好きだった先輩が、私をフツた時のセリフが今でも忘れられないから。
「ごめん。お前のことは友達以上に思えない。俺が好きなのは姫川詩穂。あいつ、めっちゃ優しく